

OSAKA-JIN

大阪スタイル  
[再発見]マガジン

vol.53

大阪人

OSAKA-JIN

vol.53 JULY 1999

第53巻7号 平成11年7月1日発行 昭和23年4月24日第3種郵便物認可毎月1回1日発行 編集長 藤田明之 発行責任者 富永行徳  
発行所 〒541-0041 大阪市中央区北4丁目1番21号住友生命ビル605号 株式会社 大阪都市出版

定価580円

53(円)

Enjoy!

Coca-Cola

Trademark Regd.

大阪市立中央図書館



10 065616

この街で、  
生きてる刺激。

大阪市立中央図書館



10 065616

桑名正博「僕らの時代が、またやって来た」  
森村泰昌「ギャラリィを訪ねて、街を語る」

角野幸博●大人のアメリカ、昨日・今日・明日  
豊島美幸●わからなくてもいい、面白がる気持ちがあれば

佐々木慶久●大阪の若者が、アメリカと出会ったあの日

巻頭エッセイ・田辺聖子「ニッ」

ミートTHEアート「草間彌生」やなぎみわ

リニューアル  
創刊



雑誌 02183-7

T1102183070586



# 特集 アメリカ村、

若者の街と呼ばれ続けたアメリカ村ももうすぐ30代。  
アメ村育ちの大人たちも、アメ村を知らない大人たちも、  
自分たちの言葉でこの街を語る時が来た。  
リニューアルした「大阪人」、最初の特集企画は  
30代以上の世代のためのアメ村散歩。  
歩き方も楽しみ方もひと味ちがう大人のセンスを究めたい。



# 30 歳。

大阪市中央区  
西心齋橋。  
通称「アメリカ村」



# 桑名



特集◎アメリカ村、30歳。  
アメリカ村、再び。

## 僕らが遊べる街をつくらう

何かをやりたくて集まってきた仲間たちがアメリカ村をつくった七〇年代。時代はあれから移り変わり、九〇年代も終りを迎えようとしている。街の表情も変わったが、誕生の頃の熱気は今も語り伝えられている。

アメリカ村のあたりは僕らが十代の頃は駐車場や倉庫しかなくて、寂しい場所だった。みんな元気があったから、あそこをよく喧嘩したもんやけど、あれから三十年近く経つんやね。

その後、ぼつぼつ店ができたして、日限萬里子のバームスにサーファー仲間て古着の店とかやってた連中がみんな集まりだした。萬里ちゃんもアメリカ村つくりろうと言って旗もって頑張ってた。僕はその頃、「セクシャル・バイオレットNo.1」がヒットして、仕事ばっ

かりしてアメ村にはなかなか行けなかった。その五、六年の間にどんどん店ができて人が来るようになったね。

また飲みに行くようになったのは十年くらい前から。メリケンジャップという店が三角公園の北側にあって、友達が行っていたから気心がしれた店だね、応援してやろうとよく行った。ネストという店にもよく行った。アメ村で仕事してる連中が集まってきた、一緒にわいわいと飲んでた。

昔のアメ村はサーファーが多かった。アロハ着てウエスタンブーツはいてという、西海岸風の雰囲気がありましたよね。バーの作り方もアメリカっぽかった。最近のアメ村は昔僕らが着てたようなファッションがまた出てきたりしてるけど、なんとなくバンクっぽかったり、ニューヨーク風のものも混在

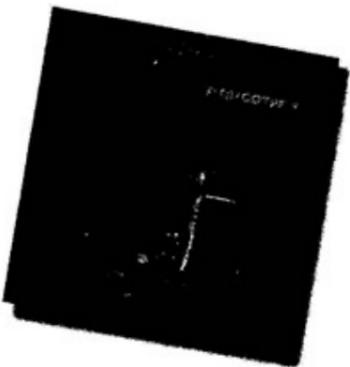
# 正博

歌手

僕らの時代が、  
またやって来た。

今からおよそ三十年前、ミナミのはずれの駐車場と倉庫だけの寂しい場所に、ぼつぼつと若者たちの小さな店が生まれはじめた。僕らが遊べる街を僕らの手でつくらう。

アメリカ村とともに年齢を重ねた  
世代の思い……ロックシンガー  
桑名正博の熱いトークは全開だ。



くわな・まさひろ●1953年大阪生まれ。71年渡米、サンフランシスコで音楽を学び、帰国後ロックバンド、ファニーカンパニーを結成。76年には「WHO ARE YOU?」でソロ歌手としてデビュー。「哀愁トゥナイト」「セクシャル・バイオレットNo.1」などのヒット曲がある。79年には日本有線放送大賞受賞。昨年は新バンドTHE TRIPLE Xを結成し、初アルバム「WE ARE THE TRIPLE X」を発表した。



している感じかな。街に来る人も、僕らの時は遊び慣れた大人が多かった。今は古くからここに来てる連中と高校生とが混在してますよね。

みんなでアメ村つくろうとってたのはやっぱり仲間意識からかな。服屋をやるという連中とか、飲み屋をやる、雑誌をやるんや、というようにいろんな仲間がいて。みんなあの頃のアメ村が西海岸のムードが好きやったというのが共通点やった。要するに自分たちがほっこり飲める場所がほしい、歩いてても似合うような街をつくりたいということやったんや。ちがうかな。ミナミのもともとの繁華街というアメ村から御堂筋をはさんで反対側の心齋橋、道頓堀やけど、あつちは若者が落ち着ける店がなかった。それやったら自分たちでつくったろうという感じやったと思いますよ。

### 再び時代はめぐってくる

アメ村が産声をあげたあの頃を知る世代だからできることがある。ここは自分たちの街という意識を持った世代が、今もう一度自分たちのための面白い街をつくらうと頑張りはじめた。

今のアメ村はみんな同じことやってる感じやね。若い子にパワーがない。年上の僕らを食ってやろうというくら

いのエネルギーがほしい。ただ、若い子はいい意味でコピーすることにこだわりがないでしょう。僕らの世代はオリジナルリティにこだわりがあるから、コピーはできない。ところが若い子はいいものはほとんどコピーして自分のものをつくっていく。

でも、やっぱりね、今は四十代、五十代の連中がもっと頑張らんといかんという気がする。今のアメ村に小さい店がいっぱいあるけど、若い子が自分でやってる店は少ない。昔は若者の小さい店からサクセスストーリーがいったい生まれたい。それを僕らがもう一度やらなあかん。

僕がヒット曲を歌ってた頃は、お客さんのニーズと自分のやりたいことが離れていって、四十代になった時にはこれは何か違うなと思うようになった。それで、この年代になったからできる音楽をやって、お客さんも喜んでくれるロックバンドをつくらうよと同年代の仲間と呼びかけた。それがTHE TRIPLE X (トリプルエックス)。僕らがそういう気持ちになつた時に、アメ村に行くのが億りちゃんが「わたしもう一度頑張るねん」というて新しい店つくるといって話をしていた。それを聞いて、四十代、五十代が今もう一度何かやろうとしたしている時期やなと

思った。万里ちゃんが南堀江に開いた新しい店、ミューゼもカフェだけやなくていろんなアーティストに開放空間を提供しようとしてるでしょう。昔そのままやなくて今の時代のことやってるのがいい。

若いやつには負けへんで、じゃない。僕らがいい気分であられる街をつくらうとしてやってきたんやから、もう一度それをやろう。この数年のうちに、みんなぼちぼちとそういう気持ちになつてきてるんやろね。それまではそんな話をしてても耳も傾けてもらわれへんかったけど、今はしゃべっていると聞いてくれる者が増えてきている。パブルの時はみんな浮かれてたけど、いざ見回すと落ち着いて飲める店がどこにあるねん、いつのまにかアメ村になくなつていってやないか、やっぱり一緒に飲めるのはあの頃のアメ村の仲間やな、と思いますよ。アメ村が生まれてから三十年近く経って、また時代がめぐつてきている。僕らの世代が頑張らんと面白くないとちがうかな。

### 僕らの年代のロック

四十代、五十代だからこそ歌える歌がある。若者に煽ることなく、自分たちの年代にとって面白いロックをつくりたい。アメ村にもそんな同世代の心意気がほしい。

アメ村の音楽シーンというと、昔はポイントアフターというディスコがあったくらいでね、ライブスポットというのなかった。今はサンホールやگرانカフェでライブをやってるけど、あとはお店を開放してライブやるのが時々あるくらい。THE TRIPLE Xはこの六月にビッグステップのホール、ビッグキャットでライブをやったけど、同年代だけやなくて若い子らが集まってきたのが面白い。僕らの年代が好きになようにやっていると、若い子らがついてくる。若者に向けてやらんでもええ。アメ村もそのくらいの感覚の街になつたらええと思う。

僕らがTHE TRIPLE Xをつくった時も、昔懐かしいことやってたただめや、もう一回僕らの年代のロックを生み出していくというパワーが必要やと思った。あの日は懐かしかったね、じゃあかん。それにロックはええかっこしてもあかん。みんなお互いにもうおっさんや、この年代になつたからこそ歌える歌がある。ただ盛り上がるだけやったら面白くない。心の痛みみたいなもんがわかる年代のバンドにしたい。THE TRIPLE Xというバンド名もアダルトオンリーという意味です。アメ村もそうやってほしいなと思いますよ。

# 森村

## アメ村の四つのギャラリー

アメリカ村の四つのギャラリー、「ラ・フェニ  
ーチェ」「複眼ギャラリー」「タンク・ギャラ  
リー」「ピクチャー・フォト・スペース」を森村  
泰昌が訪問。街の空気が演出する美術と人の出  
会い。そんな視点で歩いたもうひとつのアメ村  
レポート。

アメリカ村の四つのギャラリーを今  
日あらためて歩いてみて思いましたが、  
みんなそれぞれ個性がまったく違うで  
しょう。そこがいいですね。

「ラ・フェニエーチェ」は非常にゆっ  
たりとした空間を持っていて、まわり  
の街の変化とは異なる時間の流れを保  
っている。その中でいい企画を続けて  
いこうというスタンスがいい。

## 「複眼ギャラリー」

の良さは若さでしょう  
ね。美術のいろんな動  
きを見渡しながら、こ  
れからどんな風にやっ  
ていくかを若い感性で  
考えている。一途な姿  
勢がいい。

## 「ピクチャー・フォ

ト・スペース」はいい  
作品を紹介してきちん  
と売っていく、画商的なスタンスでや  
っている。これはこれで、もちろんい  
いことです。

## 「タンクギャラリー」

はまさしくサ  
ツ・アメリカ村という雰囲気ですね。  
大きな犬が寝そべっていたり、カフェ

## ギャラリーを訪ねて、 街を語る。

ファッションばかりがクローズアップされるアメリカ村に、  
こんな個性的なギャラリーがあった。  
美術家、森村泰昌が見たアメ村は、  
この街だけの空気をまとった面白空間だった。



特集◎アメリカ村、30歳。  
アメ村ギャラリー探訪

# 泰昌

美術家



もりむら・やすまさ●1951年生まれ。80年代半ばから  
古今東西の名作絵画に「なる」写真作品の制作をは  
じめる。グループ展「ラディカルな意志のスマイル」展  
で、ゴッホの自画像をテーマとして発表。以後、88年  
「ベニス・ビエンナーレ・アベルト88」、89年「アゲイン  
スト・ネイチャー」アメリカ巡回展などに出品。90年制作  
のレンブラントの絵画イメージをベースにした作品「九つ  
の顔」で、はじめてコンピュータ合成による制作をは  
じめる。96年個展「美に至る病／女僕になった私」(横  
浜市立美術館)で女優シリーズを発表。98年個展「空  
装美術館／絵画になった私」(東京都現代美術館・  
京都国立近代美術館・丸亀市猪熊弦一郎現代美術  
館)を開催。98年秋には大阪の中央公会堂で開かれ  
た「テクノテラピー」の総合プロデューサーを担当した。  
ホームページ「森村泰昌百貨店」(www.morimura.  
gr.jp)を7月1日よりオープン予定。



とひとつになつていたり、まわりのお店の雰囲気も含めて、アメ村を歩いている若い人たちの空間という感じがしますね。

美術というと高尚なイメージがあつて、アメ村にいる若者はなかなかギャラリーのドアを開けるまでにはならないと思う。「タンクギャラリー」ってそういう敷居の高さがないところが魅力ですね。ただ、それが仲間うちの気安さになつてしまうと馴れ合いになつてしまう危険があります。なにをやってもええやん、という気軽さはあつていいけれど、他人の目という緊張感がなくなつてしまうと、何かを高めていこうという気持ちにはなかなかならないんですよ。そこは気をつけないといけないところですね。

大阪では西天満に老舗のギャラリーがいくつかあつて、それぞれいい空間を持つているけれど、わりとみんな似ていて、どこで展示をしても基本的なスタンスの違いはない。しかしアメ村のギャラリーはそれぞれまったく個性が違ふから、展示する側も何を発表するか、どう演出したいかという気分が違つてきます。面白さや関わり方にバリエーションがあるんです。

ただ、理想を言えば、選択肢はもっとたくさんあつた方がいいですね。い

ホームページの「森村泰昌百貨店」は地下一階にフードコーナー、一階コスメティック、二階ファッション、三階ゲームコーナー、四階情報センターがあり、もちろん美術館もつくつています。美術館には館長がいて、僕らの作品を使って企画展をやります。しかしそれは最初から美術を視に求めてという感じではなく、いろいろめぐっているうちにいつのまにか出会っている。ふと気づくと、ああさつき観たのが美術やったんかなというスタンスでつくつています。

街にはいろんな魅力が重層的に組み合わさっているのがいいと思います。だからホームページと街がリンクしていい。街では全然目立たないけれど、ホームページですごく知られていれば、その空間には人が集まつて来るわけでしょう。もちろん一方では誰でも知っている、行列のできる店もちゃんもある。そういう多様さを大切にしたいかないと、街は面白くならないんちがいますか。

アメリカ村をあらためて歩いた印象は、お店も人もみんな似ているということです。似ていてもいいんですけど、特殊なお店がもっとあつてもいいのでは。今日歩いた中にオリジナルのロリ

わゆるファッションアートにこだわった欧米流のギャラリーも必要だし、まったく違ったタイプもあつていい。そのギャラリーの考え方によって、美術とはどんなものかという見方も違つてきて当然です。しかし選択肢を増やすといつても、それはひとつのギャラリーだけが考えているだけではうまくいかない。たとえば比較対象が三つあれば、自分は四番目のタイプでいこうと考えることができる。相手があつて見えてくるものがある。今の人々は好みが多様なので、いろんな選択肢がでないとそれは、人の力ではできない。だからといってみんなの手をとりあつてできるものでもないで難しいですね。計画的にできるものではない。街づくりもそうです。たとえばビッグステツプの前が若者がたむろする場になつたみたいに、予想できない人の動きが街の空気をつくつていくんだと思います。

### 道端から生まれる

ホームページで制作中の「森村泰昌百貨店」には美術館も描っている。いわはハイチヤルなギャラリー空間だが、森村流の演出で、知らず知らずのうちに美術の世界に足を踏み入れているという趣向が施されている。たとえばそんな空間が、現実のまちにあつてもいい。さまざまな空間が混在する多様性の中から文化も生まれてくる。

一タ風ファッションをつくつて売っている店がありました。ああいうみんなが買うものではないけれど、好きな人が好きな人に向けてやっていると、う店があつてもいい。これはすごく大阪的な感覚だと僕は思いますよ。

アメ村は散歩する街として好きです。日曜など人の多い時に、温泉みたいにつかっているという感じがいい。何かを見つけてよとか、ここかへ行くというのではなく、それを見て何か見つけたらするの面白。歩いている若者もみんなどこに向かつて歩いているのかわからんような子が多い。むしろそこにある種の安堵感があるんです。そういうところがいいですね。しかし、一方でそういう居心地のよさは、新しい何かが生まれる場としては不満です。何かを生み出すには緊張感というか、自分をバージョンアップさせていく気分がどこかに必要なんです。僕は街の空間では道端が好きです。大阪の若者に人気のあるファッションデザイナー、ヴィヴィアン・ウエストウッドはロンドンで道端から生まれきたといつてもいい人ですね。道端から何かが生まれると信じています。アメ村の良さをいっただいどこに見つけていくかは、これからの課題でしょうね。

# 大人のアメ村、 昨日・今日・明日。 角野幸博

武庫川女子大学生活環境学部教授

おじさん世代にとってアメリカ村とは何か。「フスタルジー」「見栄」「フリンジ（周辺）」の三つの視点で考えるアメ村像。その中から街の未来も見えてくる？

まず、「フスタルジー」としてのアメリカ村という視点があります。おじさんたちがかつて若者だった時代に歩いたあの頃の懐かしさを求めて歩く。卒業した小学校の校舎を懐かしむのと同じような感じですね。アメ村もお店や人はほとんど変わっているけど、「三

## おじさん世代のアメリカ村

角公園」はずっとあるでしょう。その近くのビルの上の「自由の女神像」も古くからありますね。「ホテルカリフォルニア」というホテルも、イーグルスの同名の大ヒット曲と結びついて七〇年代の青春のイメージを醸成させてくれます。「ブルータスビル」はできた頃は現代建築ですごくおしゃれだったのに、その後、アメ村風なごてごてとはりつけたデコレーションに変わってききましたね。あれもおじさんの目にはすごく面白い風景です。

アメ村も誕生から三十年近く経って、

若者の街、アメリカ村をおじさん世代の目で見てみたら？  
そんな要望に角野幸博が応えた。二十代の頃のこの街を歩いた記憶に、四十代になった大人の目を重ねて、もう一度じっくりとアメ村を散策。さて、その結果は？

## アメ村ギャラリー紹介

### タンクギャラリー

「いろいろな表現活動をしている人たちのTANKになりたい」と1994年にオープンしました。展示だけではなくイベントもやります。今年は隣に展示スペースも増設したので、同時にふたつの企画を進められるようになりました。期待してください」古谷高治さん  
大阪市中央区西心斎橋2-10-12 ガレッジ内  
tel.06-6211-4522  
12:00~20:00開廊 水曜休廊  
●7月のスケジュール  
[弱気茶屋の天体観測] 7月19日(月)~7月25日(日)  
[ONE and ONE缶バッジ展] 7月31日(土)~8月8日(日)  
※7月11日(日)~18日(日)休廊



### ミュゼ大阪ギャラリー

「いわゆるアートだけでなく、家具をはじめ幅広くデザインをテーマに取り上げ、ものと人の新しい関係の発信、ライフスタイルの提案をしていきたい。一階のカフェ、三階のサロンと一体化した空間の核になって、何かはじまる出会いのスペースを演出したいと思います」亀屋京子さん  
大阪市西区南堀江1-21-7 tel.06-4931-3031  
12時~18時開廊 月曜休廊  
●7月のスケジュール  
[道下浩樹展] 7月1日(木)~7月22日(木)



### ピクチャー・フォト・スペース

「大阪では最初のオリジナルプリントを取り扱うギャラリーとして1984年にオープンしました。以後、日本人作家の紹介だけでなく、アメリカ、ヨーロッパの作家を日本に紹介するという企画方針で展示会の企画、展示を行っています」相野正人さん  
大阪市中央区西心斎橋1-10-19 都ビル4F  
tel.06-6251-3225 12時~19時 日曜休廊  
●7月のスケジュール  
[Standing exhibition 1999] 7月3日(土)~7月31日(土) 出品予定作家/マルコム・バズレイ、アンセル・アダムス、オリビア・バーカー、オリビエール・クリスティーナット他



### LA FENICE (ラ・フェニーチェ)

「ラ・フェニーチェがオープンした1992年頃は、街の空気が変わる節目でした。訪ねてこられるのは30代の方が多いですね。異空間でありながら、何かを探してアメ村を回遊している方がふらりと立ち寄れる気軽さも持ち続けたいと思います」小谷弥生さん  
大阪市中央区西心斎橋1-6-21 tel.06-6244-6160  
11時~18時開廊 日曜・祝日休廊  
●7月のスケジュール  
常設展(北辻良央・赤崎みま・栗園久直他)  
※要予約



### 複眼ギャラリー

「現代美術は本来苦しいものではないけれど、かといって誰もが作家にはなれません。作家の自己満足で終ることなく、新しい価値観をみせつけてくれる作品がどんどん時代とともに出てくると思います。複眼ギャラリーではそんな作家を取り上げていきたいですね」村田典子さん  
大阪市中央区西心斎橋1-6-26 3F  
tel.06-6253-3266  
12:00~20:00開廊 水曜休廊  
●7~8月のスケジュール  
[レイ・ダンラップ展] 7月15日(木)~7月27日(火)  
[荻野瑞穂展] 8月19日(木)~8月28日(土)  
※7月29日(木)~8月17日(火)夏期休廊



東京の若い女の子たちが今年の冬、アメ村を中心に大阪の街を見に来て、いろいろ面白い感想を言っているの聞きました。僕は東京と大阪の両方の女の子の言い分がわかるので、なかなか興味深かったですね。

東京の女の子が大阪の女の子を見る目は厳しくて、たとえばこんなことを言っています。「ジーンズのシルエットが今はベルボトムが主流なのに、大阪の子はダブツとしたシルエットでだらしない」

「柄の組み合わせがストライプと花柄、豹柄と豹柄とか、自分らしさを表現しているつもりが大失敗。東京の子は今、旬の水玉を着て、サンダルにミニソックスというスタイル。ところが大阪はまだスニーカーはいてジーンズの裾を折り返したりしている」

「大阪は店員のファッションがなってない。店員がかっこいいから自分も買いたい、負けないでおこうと思うものなのに、店員がだめだからみんなのレベルが上がらない」

## 大阪・東京 若者ファッション考

東京と大阪からでは、同じものでも違って見える。大切なのは違いを面白がるセンスではないか。森村流ファッション考の結論である。

東京の子たちからみると、大阪の子はしゃべり方もだらだらしているというんです。お互いの違いが象徴的に出ていますね。もうひとつ、東京では渋谷などで若い子同士がすれちがうとばちっと火花が散るというんです。ファッション、メイクを比べて勝った負けたとやっている。大阪では視線がばちっとかえってくることはなかったそうです。これは東京の人間関係が基本的に他人同士というところからきているんでしょうね。大阪の場合は街中ですれちがう人も他人同士という感覚が薄いから緊張感がない。だからほっとする。その点、東京は疲れる。東京の子から見て大阪の子はだらだらしているというのはそういうことなんです。どちらから見るかで話が変わってくる。

ただ流行についていうと、東京の子たちは何か新しいものが出てくるとわっと飛びつくけれど、大阪には流行が少し遅れて入ってくるし、みんながわっと飛びつくわけでもない。だから東京はみんな水玉柄を着ているという現象が起きるし、大阪はエスニックも豹柄もあって、その中に水玉もあるというようにいっぱい咲いてくる。そうしてお互いに違うからこそ面白いんです。

懐かしさを感じる人はこれからますます増えてきますよ。この世代の気持ちをつかまえられたら、アメ村の支持層の幅がぐんと広がる。新しさだけを前面に押し出すのではなく、昔のまま何も変えずにそのままにしておくというやり方も一方にあっていいと思いませんか。

ふたつ目の視点は、「見栄」のためのアメ村ですね。おじさんになった世代には、若者のことがわかるふりをしてみたい、という欲求がある。若者の街といわれているアメ村を偵察して、娘や息子、会社の若い人たちと話をしてみたいという心理があるのでは。健気に努力しているという感じですね。おじさんは若い子の顔を見に行くだけでも元氣になりますから、若い気分を味わうだけでも意味はあると思います。

三つめの視点は「フリンジ」探して。賑やかな街のまん中ではなかなかおじさんはくつろげない。おじさんが盛り場に行く理由はくつろぎなんですね。落ち着ける場所を求めると、足は自然とアメ村から西や南、北のフリンジに向かう。そこでアメ村ができる前からある面白いものを探してみたりする。たとえば船のキャビンや窓をそのまま使った喫茶店「珈琲艇CABI N」は、昭和四十九年からあります。

年老いていく。若い時に初めて行って気になったバーにずっと通って、過ぎていく時間を共有しながら、やがて客は定年を迎え、店も閉じていく。そういうかたちがアメ村にも少しあっていいのでは。

アメ村を卒業した人たちが次にどこに行くか興味がありますね。とりあえずは長堀通りの北側、カナダ村の方に、アメ村を卒業した二十代半ばから三十代の人たちがよく足を伸ばしているようです。しかし、むしろ僕は西側がどうなるかに興味があります。テナントが入る余地のある建物がまだあって、「なんか面白いことを使ってみないか」と言ってくれる太っ腹の家主がまだこのあたりにはいると思えますよ。かつてのアメ村のように裏手の立地で賃料が安い場所があって、儲けなくてもいいから自分たちの好きなことをやりたいという素人との接点があれば、こっちのエリアが大いに伸びる可能性がある。

今日あらためて歩いてみて面白いと思ったのは、駐車場裏のアジアマーケットです。それから路地のような空間にいっぱい小さな店ができていますね。外に広がるだけでなく隙間を見つけて中に広がっているというのは面白いと思いますよ。

船に乗った気分で見下ろせるのがいいでしょう。以前は、アメ村と「ヨーロッパ村」という御堂筋をはさんだ東西軸の対比がよく言われましたが、最近は北に伸びていくベクトルがあつて、アメ村よりはやや大人の感覚の新しい店がいろいろ出現しています。アメ村の北なので「カナダ村」と呼ばれていますが、面白いですね。

### アメ村卒業生はどっへ

アメ村を歩く若者の低年齢化が進んでいる。今、中心世代といえば中高生。十代の街、アメ村は青春の一時期に通り過ぎていく街になりつつあるのかもしれない。大人になった後の彼らはどこへ行くのだろうか？

今のアメ村は、十代後半の若者にとって街の遊び方を勉強するのにぴったりの街なんです。その意味でここはみんなが思春期から大人になっていく時代に通るべきという場所です。盛り場の中学、高校というような街だと思えます。訪れる人はほとんど変わり、お店の経営者も変わるけれど、やっっていることはいつも同じということですね。

しかし、盛り場についてはもうひとつの考え方があります。飲み屋によくあるパターンですが、客と一緒に店も

### 大人のアメ村、昨日・今日・明日。



かどの・ゆきひろ●1955年生まれ。武庫川女子大学生生活環境学部教授。電通大阪支社勤務等を経て現職。「大阪の表現力」「都市デザインの手法」「空間の原形」「駅とまちづくり」など著書共著多数。

です。ただ、街のシンボリックなものには必要ですね。今その役割を果たしているのは三角公園と黒田征太郎さんの壁画だけですが、ビッグステップの階段なども名所になっていけばいいんですけどね。三角公園で行われているパフォーマンスも、そこに出てくるまでに審査をくり抜けないといけないというふうなパフォーマーの登壇門的な場になれば面白い。アメ村の中に御津八幡神社という閑静な神社がありますが、あれも周辺の路地と対で門前町を形成していけば可能性が広がると思いますよ。

#### ホストファッションの波は来るか？

一時言われていたほどアメ村がファッションの先端を今もリードしているかという点、ちょっとあやしいですね。自ら新しいものをつくりだすというよりも、雑誌などで見たファッションをここで実際に見に来ているような気がしま

アメ村は御堂筋を挟んだ心齋橋筋とともにミナミの二大集客ゾーンですが、今は人の流れがアメ村側の方に向いてきている。アメ村は「ここに来たらいつも何かあるよ」と、新しいことを常に言い続けたいといけないうゾーンですね。今は修学旅行のコースにもなつて観光地化していますから、その意味でいうと、そんなに最先端の新しいものでなくてもいいん

#### 集客ゾーンとしてのアメ村

気になるのは、アメ村はファッションの街でスタートしたけれど、その次に来るものがまだ見えていないことです。中高生が中心世代になったことも関係があるのかもしれませんが、ギャラリやライブハウス、芝居小屋など、他の何かをもっとできてほしいのは。ファッション、飲食、文化的なもの三つが揃うともっと面白くなると思いますよ。

#### 個人的な体験

アメ村を歩くようになったのは今から二十年前、二十代半ばの頃です。当時、アメ村はそろそろメジャーになりかけていて、サーファールックの店など風景として眺めながら、何か食べに行こうかというふうな感じでした。ただ、飲食店はまだまだ少なく、道頓堀あたりの飲み屋がいっぱいあるあたりへ足を伸ばしていた。アメ村ができる前からある「吉田バー」なども、その頃先輩に連れていかけてもらいました。

今から十年ほど前、電通に在籍していた頃はビッグステップのプランニングコンペにも参加しました。その時はアメ村、ミナミを徹底的に歩いて回り、大阪の盛り場の構造みたいなものまで突き詰めて考えました。コンペでは僕たちのプランは通りませんでした。その後、アメ村がどんな風に変わつていくのか興味を持って見えますよ。



四十代以上の読者に一言  
身構えず、  
見たままを面白がつてみよう

年配の方はアメリカ村というと、つい若い人の街やと思つて身構えて行くでしょう。そうすると居心地悪い。若者に媚びることないんです。アメリカ村に行くと、スカートはいてる男の子とかピアスし放題の女の子とかいますよね。私の母は六十代ですけど、それ見てきやっきゃっ喜んでますからね。絶対に「あれはだめ」とか「変なことして」とか言わないんですよ。自分たちの世代と違うことをしているのを見るのが楽しいんですよ。だめという気持ちを持っていくと楽しくない。それに年配の方が入りにくい店もあるかもしれないですが、もし入っても変な目で見られることは絶対ないと思う。それがこの街のいいところ。そのへんがわかってく

ると年配の方も気持ちよく歩けると思えますよ。

まずは、御堂筋からお米ギャラリーの角を西に入り、ビッグステップの前を通過して三角公園までとりあえず歩いてみてください。若者がいっぱいのお店がたくさんあって、おこれがアメリカ村やとまわりを見渡してみる。人が並んでいたら、とりあえずどこでも並んでみる。郷に入れば郷ひろみとおやじギャグで言うでしょう。並んでみたら、たこ焼き屋やったり、郵便局のキャッシュディスプレイやったりいうのが面白い。それがええんとちがいますか。でもね、別に無理にアメリカ村に行かなくてもいいんです。マスコミの情報に気がしたり、わかっておきたいとか、時代に遅れる、とか言っても仕様がない。わかるというようなものはなくて、面白がれるかどうかが大したことだと思いますよ。

## わからなくてもいい。 面白がる気持ちがあれば。

アメリカ村が気になるという大人が増えているという。  
「週末は20万人の人出やて」「若者の流行の発信地らしい」  
情報はいろいろと耳にするが実像はなかなか見えてこない。  
そんなアメ村をもし歩くとしたら……。

豊島美雪が語る体験的アメ村散歩のススメ。

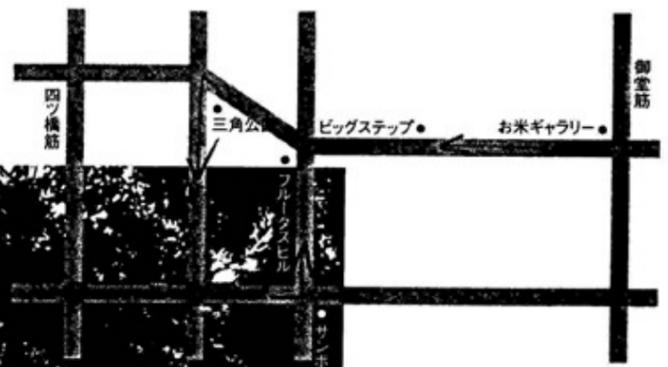
豊島美雪 パーソナリティ



仕事を始めた80年代前半頃の写真。  
「何してるんでしょね」とは、ご本人の弁。



とよしま・みゆき ●1960年大阪生まれ。MBSラジオ「おはよう川村龍一です」はじめ放送を中心に活動。他に朝日新聞に「リレー時評」を3年連載。講演、「魔法の朗読会」開催など活動の場を拡大している。98年には豊島美雷事務所を開設。



### アメ村散歩'80 街の空気が好きだった

私がアメ村を歩きはじめたのは今から二十年前くらい前です。その頃は今のようにお店がひしめきあってなくて、面白いお店がばつぱとあっただけでした。アメ村という名前も意識せず、自分らしいものを探して、居心地もいから行きたかった。私は情報誌を見て買い物に行くタイプではないので、ミナミを歩いていたら面白いお店があるのをたまたま見つけたという感覚でした。

### わからなくてもいい。 面白い気持ちがあれば。

ちょうどロックンロール事件があった頃でした。音楽はロックが元気で、私もバンドをやっていた練習でアメ村の貸スタジオによく来てたんです。私は高校を出た頃で、服を選ぶにも自分らしいもの、好きなもの、はじけたものが欲しい時期でした。当時は他に今ほど若い人のものを探せる場所がなかったけれど、アメ村には個性的なお店が多かった。雇われてるから、それを売るのが仕事やから売ってるのではなくて、それが好きやから売ってるという感覚ね。好きなものを好きになつてくれた人に売るといふスタンスの店が多かった。そこに行ったら自分よりちょっと

だけ先輩のオソソリテイがいて、いろいろ教えてもらえた。そういう街の空気が好きでした。

今でも私はアメ村のそんなところが好きで、何か探しに行くと、お店の人と趣味が同じ者同士の会話になるんですよ。これは何年の何やねん、ええのん見つけたね、という話になったりね。そういう話しながら買物ができるというのがいい。こちらが何か聞くまでほっとしてくれるし、聞くとそんな話ができる。それに私は仕事のままスーツとかの格好で行く時もあるでしょ。するとちよつと雰囲気が浮くんですよ。年齢的にもアメ村の中心の世代とは違いますね。それでも何しに来たんやという顔はされません。たとえば一枚のTシャツを介してやっぱ話ができる。そのへんがアメ村の居心地のよさですね。

### 私のアメ村散歩ルート 三角公園を見ると アメ村に来た気分がする

私のアメ村を歩くルートは不思議なことに高校時代とあまり変わらないんですよ。難波の方から来ても心斎橋から来ても最初は絶対に御堂筋の東京三菱銀行の角、お米ギャラリーのここ

ろを西に入っていく。そして三角公園を見ないとアメリカ村に来た気がしない。昔はここから左側がにぎやかだったので、そちらに曲がった。そこからさらにサンボウルのところを曲がってぐるりと戻ってきて、三角公園の派出所が見えたとこで安心する。後は裏の路に入ったりビルの二階に上がったりするわけですよ。当時はここらへんがメインストリートで、その後、お店がまわりに広がっていったんですね。私は商店街探検家を自称して、とにかくお店を見て回るのが好き。この間もアメ村を六時間歩きました。このくらい時間かけるのはいつものことですけど、結局、何も買わないこともあります。今は昔よりの店で何を売っているのかがはつきりして、思わず掘出し物を見つけては減ったかな。でも楽しみ方は基本的に今でも変わってないですね。インドもの類、払い下げ類、アンティーク類とかバラエティが豊富で、ちよつと値の張る一品物もあつたりして面白いですよ。週末は混雑するけど平日は歩きやすくいいですね。

ただ、この二十年前でアメ村もちよつと変わってきたかなと思います。以前はアメ村に行く時は先端の格好してそれを見てもらいたい、というところが

った意識があつたと思うんですけど、そんなステージっぽい感覚は薄くなつてますよね。有名になつたので遠方から観光気分で見に来る子もずいぶん増えました。お店の方もDCブランドが入ってきたり、商業ビルができたりして、雰囲気が変わってきました。今はアメ村の北側にできた通称カナダ村が面白いと言われはじめてます。モノよりもセンスを売る店ができてきているから。今の私はアメ村にももちろん行くけれど、テリトリーはだんだん北側に広がってきています。

アメ村はこれからも移り変わっていくんですけど、何かしたいという

### 十代の頃、 アメ村は私のステージだった。

アメ村一問一答

十代の頃はどんなスタイルでアメ村に？  
私、この仕事をはじめたのは19歳からなんです。それまではジーパンに白いシャツまたはTシャツ、その上に当時サロベツといわれていたオーバーオールみたいなものにベタベタはりつけたようなものを着て、下駄をはいてました。当時どこにも下駄はいてる子はいなかった。とんがった気分ではなく、当時下駄をはくものがなかったんですよ。(笑)

アメ村ではどこのお店に？  
当時行った店の名前は覚えてないんです。今みたいこのブランドだから買うとかいうのではなく、お店の名前は関係なく面白いものを探して歩くのが好きでしたから。あの頃はまだフリーマーケットもあまりなかったから、フリーマーケットスタイルのところには行きましたね。こんなものを買ったという思い出は？  
ごめんね、私ものに執着がないのでこんなもの買ったぞという記憶に残ってるものがないんです。でもあの頃のアメ村は私にとってステージみたいなもの。昔の心づらにあたるんでしょうか。カッコいい、これいけてるという格好で歩きたい、見られるのを意識しながら歩いた私の最初の体験がアメリカ村でした。

# 大阪の若者が アメリカと 出会ったあの日。

アメリカ村の誕生は1971年、アメリカ西海岸で買いつけた古着やレコードを現在のアメ村の敷地内で売り出したのがきっかけだった。

80年代後半から70年代にかけてアメリカを席卷したカウンターカルチャーの影響は、今もフリーマーケットというかたちで受け継がれているという。71年当時、大阪の若者に新しい文化への目を見開かせた西海岸ツアーを企画し、アメ村誕生の仕掛け人となった佐々木氏にインタビューした。

佐々木慶久 FM101代表



カリフォルニア大学バークレー校の  
夏期キャンパスを紹介したパンフレット。

## アメリカ西海岸での衝撃

一九七〇年前後のアメリカは、ベトナム戦争の反対運動が起こり、音楽やファッションではヒッピー文化がムーブメントになって、若者の意識が大きく変わりつつある時期だった。一方、日本では七〇年の日本万国博に六千四百万人が来場、七〇年にジャンボジェット機が就航し、七二年には航空運賃の体系が改正され団体向けの海外パックツアーが売り出されはじめた。海外の有名ミュージシャンたちが来日コンサートを開催するようになったのも、この頃からである。日本の若者たちの目が外に向かって開かれようとしていたまさにその時、「事件」は起きた。

一九七〇年、大阪で開かれた万博は

まさに黒船の到来でした。海外旅行もまだ一般的でなく、外国の文化も実物に触れる機会が少なかった時代だったから、万博に空前の来場者が集まった。そんな時代の空気の中で、大阪の若者たちがアメリカ西海岸で生の音楽やファッションに触れた。その衝撃がアメリカ村をつくったんだと思います。学生時代、私はアメリカ、カリフォルニアに旅行して、手作りのアクセサリーや古着を売る若者たちに出会った。大学の講義にも当時すでにエコロジー問題が取り上げられていたり、衝撃を受けました。この体験がもとで卒業後、海外旅行の会社を興して、さらにはアメリカのカリフォルニア大学バークレー校でジャパンフェスティバルを開催し、百六十人の大阪の若者をツアーで連れて行きました。

ささき・よしひさ●1943年大阪生まれ。映画配給会社でプロデューサーを務めた後、アメリカ西海岸、ハワイにトラベル・エージェンツとして駐在。71年にはアメリカ村誕生のきっかけとなるツアーを企画し、アメ村の仕掛け人と呼ばれる。93年、現在のエフ・エム101(ワンオーワン)を設立。フリーマーケット主催、イベント企画を中心に事業を展開している。



その時驚いたのは、レコードや古着を何千点と買い込む若者がいたことです。ひとつ二万円もするポタンを買ったりね、新しい価値観を求めているのが、こちらにもひしひしと伝わってきた。こちらにもひしひしと伝わってきた。大阪に帰ると、彼らは今のアメリカ村で続々と店を出しはじめたんです。その頃、難波や心斎橋に比べて裏寂しいイメージのあったこの界隈が、その後は、あそこに行けば面白い店があるよという若者のクチコミで、いつしか村は定着していきました。

**若者文化の先端が大阪に**

佐々木氏のツアーに参加したのは、いわゆる団塊の世代の若者たちである。六〇年代の学生運動の担い手だった彼らにとっても、目の当りにした西海岸の若者文化はまさにカルチャーショックだった。

西海岸に行くと、ジョン・バエズやボブ・ディランがドルコンサートをやってた。我々の世代からすると考えられないこと。パークレー校の前にはヒッピー文化の発信地だった通りがあって、自分たちが作った品を持ち寄るフリーマーケットの原点になるも

のがあった。こんな風景は日本の大学にはなかった。みんな衝撃を受けていましたね。

パークレー校では日本の映画やアートなど若者文化を紹介するイベントもやりました。パークレー校のドミトリ（寮）で寝泊りした後、一カ月ほどみんなで全米を回りました。このツアーは翌年も開催し、また百六十人連れてパークレーに行きました。一カ月間で約二十万円の格安ツアーで、大変な反響でしたね。

今こそ海外旅行者は年間千五百万人と誰でも気軽に行くようになりましたが、当時はやっと年間百万人くらい。海外文化に直接触れる機会、実物を見る機会は今よりずっと限られていた。アメリカ一カ月滞在ツアーなんて、大阪にしかなかったんですよ。いわゆる海外旅行ブームが起きるのはまだ先ですし、その意味でも時代の先を行っていたと思います。

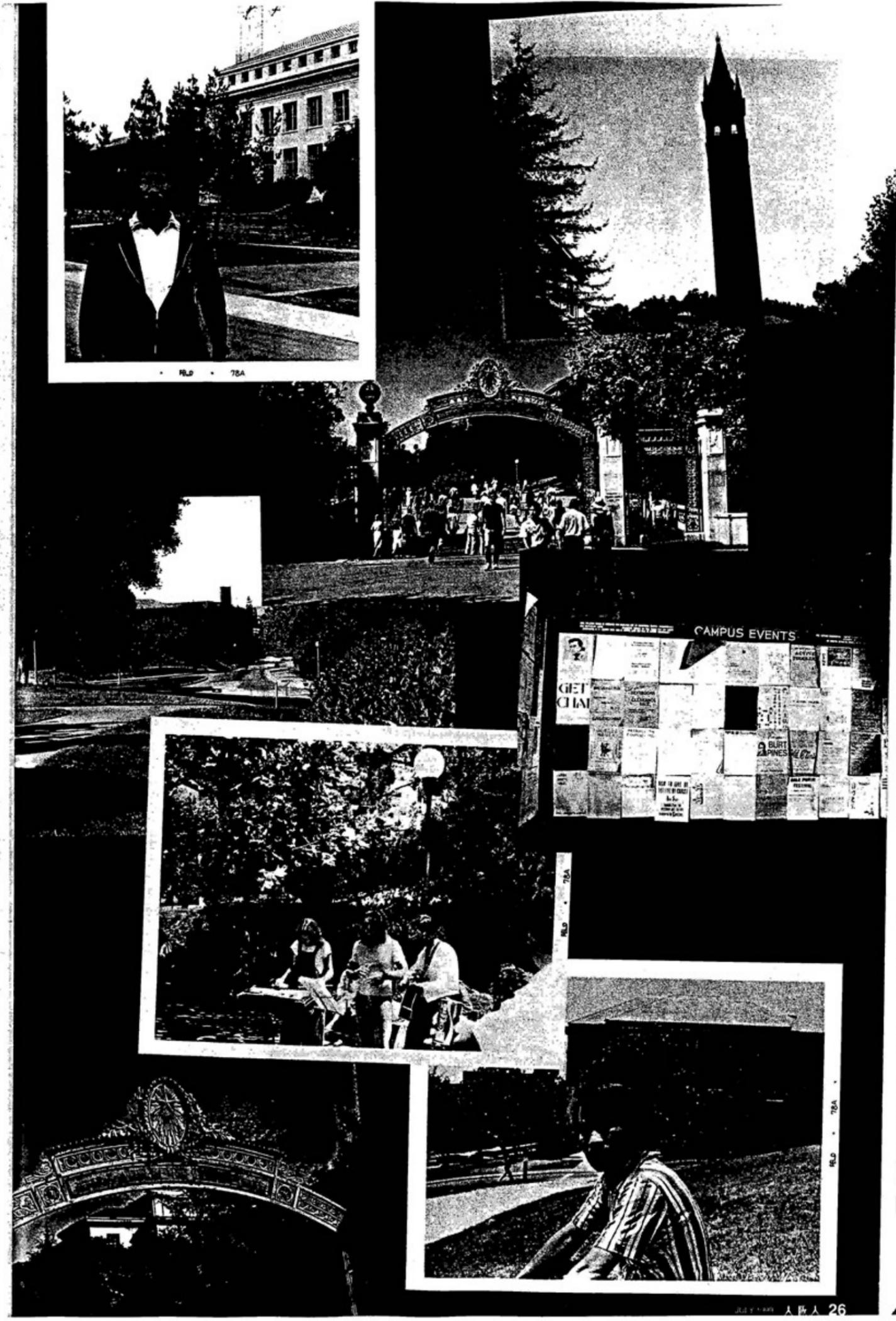
**アメ村は第三世代の時代へ**

「アメリカ村」という名前の登場は一九七二年のこと。誕生から三十年近くが経ち、「大阪に来て行きたいところのベスト5」にも入り（大阪商工会議所調べ）、海遊館などとならんで、

**大阪の若者がアメリカと出会ったあの日。**



右ページ/1970年代初期のカリフォルニア大学パークレー校風景。(佐々木氏私蔵) 左/プレイガイドジャーナル社が発行した1974年のツアー案内。





## 熊野の海

文・青木茂夫 え・松葉 健

いま、南紀熊野体験博で、紀伊半島の森に観光の新風が吹き込んでいます。島崎藤村の長編「夜明け前」は、「木曾路はすべて山の中である」には始まり、明治維新前後における一族の闇を描いたが、熊野の作家中上健次は「熊野はすべて闇の中である」と言い、昭和の一族の闇を書いた。熊野の山河と人間の闇が、中上健次の世界に濃密にたち込め、激烈に渦を巻いていた。

生前、まだ元気であったころの中上健次に会ったことがある。ある俳人の卒寿の会で、お互い相当酔いつぶれていて、簡単な数語を交わしただけだったが、彼はそのあとすぐ二次会の群衆の中に分け入ってロックを踊りはじめた。いかにも土俗的な肉太の体が、激しくゆれ動いていたのをぼんやり遠く眺めたのを覚えている。

「兄やん、兄やん……。まるで、熊野の海のみえる小高い山の、うちの墓地におる兄やんを、おおさかのこの針中野まで呼ぶみたいにわたしは言う。兄やん、兄やん、ふみこはここにおるでえ。ふみこがここにおるでえ。兄やんとよう熊野の川で泳いだねえ。母さんの子供みんなで、春に三輪崎の海岸へ弁当たべにいったねえ。」砂浜が熱かった。丸くて白いつやつやしたまるで海の中で熱心な職人が丁寧にみがきあげたような石があった。黒い石もあつた。わたしらはひとつずつ声をあげて競ってひろいあつた。海は青かった。海の上がきらきらして、眼がきすついでしましそやつた。兄やんの投げた石がぼんぼんと海のきらきらの上をはねた。それはとびはねたいくらい楽しいという兄やんの感情みたいな気がした。なんであんなに波がなかったんやろ、と不思議なくらい海は静かだった。なんでやろ、熊野の海があんなに静かにおとなしくあつたのは、あとにも先にもあの時だけだったという気がする。水平線の周辺に白い船がうかんでいるんやろか、それとも母親がはしゃぎまわる子供らをつれて旅をする客船やろか（補陀落）

二十四歳で自殺した「その兄やんの歳を六つもよけい生きてしもた」妹が、その兄に呼びかけ、語りかけ、遠い昔の瞬間の平和を回想しながら慟哭する姿を描いているが、それにしても、なんと美しい海の光景であろう。まぶしい春の光、水面をはねる小石、水平線に浮かぶ白い船、「あとにも先にもあの時だけだった」という不思議な海の静けさ。

母と五人の子どものドラマは、このあと暗く激しい嵐に包まれていくのだが、そうであればこそ、この回想の海の風光は刺すように明るい。中上健次の熊野は、そういう人間世界の明暗を見せて涙ぐましいのである。

今やアメ村は全国的にも知られた人気スポットに成長している。

「アメリカ村」という名前が最初に使われたのは一九七二年にブレイガイドジャーナルがその百貨店で開催した、「アメリカ村夏の陣」というイベントからです。その時は、田川律をはじめ錚々たる前衛芸術家に参加して、新しい文化をつくっていくんだという熱気が感じられましたね。

アメ村をつくった第一世代は七十年代に播磨期を過ごし、七九年あたりから注目を集めはじめた。第一世代は自分の趣味の延長線上で、商品も自分自身が好きなものを売っていた。アメリカ西海岸文化の影響も残っていて、かなりアグレッシブな感性を発信していたと思います。

八〇年頃からは第二世代の時代です。バブル期の弊害もあってかアメ村にも商業主義的な風潮やコピー文化の問題なども起きました。

九〇年くらいからは第三世代の時代に入り、フリーマーケットなどで成功した人たちがアメ村でお店を持つようになってきています。今アメリカ村に週末は十万人もの人出がある背景にはフリーマーケットの盛況があるんです。たとえばアメ村で売れなかった商品が

フリーマーケットで最終的に捌けるので、安定したビジネス展開ができる。私は南港などでフリーマーケットを定期的に企画していますが、毎回行列ができる人気ですよ。ラジカルな考えを言わせてもらえば、フリーマーケットとアメ村は相関関係にあって、共存共栄しているんです。私の中では七〇年の西海岸ツアーで見たアメリカのエコロジ運動と現在のフリーマーケットはつながっているんです。アメリカでも市場の主流は今アウトレットとフリーマーケットですし、これからの展開も大いに期待できますね。

佐々木氏の事務所はアメ村のシンボル、三角公園の前のビルにある。窓の外に若者がいっぱいいる風景を見下ろしながらのインタビューである。

「現在、アメ村の店舗は約八百。最近では売る方もお客さんもちょっと画一的で大人しくなつたでしょう。ただ第一世代の残したものは今もインプリーディングされて、街のエネルギーになっていきます。今でもアジア系の商品をアレンジしたり、面白いものが出てきていますね。まだまだここには可能性が秘められていると思いますよ」

アメ村の仕掛け人は今でもこの街の面白さに引かれ続けている。

## 大阪の若者がアメリカと出会ったあの日。



1970年代の後半にはアメリカ西海岸を紹介した旅行ガイドが、多く発行された。